



## 第141回 コスパでは測れないもの

大学で医学生を教えている、よく聞くのがコスパという言葉だ。パフォーマンス（成果）にみあうコスト（手間や時間）バランスという意味で、労力や時間をかけた割に成果が少ないとコスパが悪いという。コスパが悪いことはだいたい敬遠される。試験勉強も同じで、いかに低コストで楽に良い点を取るかが求められる。たいへん合理的ではあるが、どこか短絡的で好きになれない。私のような昭和世代は、結果が出るまではとにかく真剣に必死になってやれと鼓舞されたものだが、今の若い世代にはあまり理解されないようである。

### ▼幸田露伴の教え

幸田文は暮らしの様々な情景を簡潔で美しい文体で表現したが、彼女の父である露伴から暮らしの細々について厳しい指導を受けた。包丁の使い方、掃除、障子の張り替え、すべて露伴自身がやって見せて指導したらしい。私が子供だった頃、古い実家の大掃除はとてもたいへんだった。障子は池につけて紙をはがす、畳をあげてほこりをたたく、葉付き竹での天井のすす払いなど、年末の一大行事だった。露伴は「障子を池にぶちこむなど怠慢の極みだ」と怒ったらしいが、障子の張替えを膝立ちで無駄なくこなす露伴の所作を、娘の文は美しいと感じたと語る。露伴の教えは、煎じ詰めれば「これ渾身」ということであった。だから露伴は、「手抜き」をもっとも嫌い軽蔑した。現代に露伴が生きていれば、コスパという言葉にどんな感想をもつだろう。

もちろん、露伴の考えが絶対に正しいというわけではない。家事の大部分は機械化で随分楽になった。今の生活から炊飯器やIH調理器、掃除機、湯沸かし器などがなければ、明治時代に逆戻りである。ある意味で、家事の進歩はコスパを改善してきた歴史といっても過言ではない。

### ▼コスパで生まれる物語への傾斜

家事が機械化されて時間の余裕が生まれた。そのぶん、女性の社会参加が活発になったことはとても良いことだと思う。だが、できた暇な時間とは裏腹に、その時間で「あなたは何かをするのか」という問いが生まれる。家事だけで一日の大半が終わっていた明治の時代、次々と段取りしなければ家事が終わらない慌ただしさの中で、充実感をかみしめていた面もあるのではないか。家事の時間が短縮され暇が生まれたとき、人はなにか意味のある事を求めるようになる。そのひとつが「推し」ではなかろうか。朝井リョウの「イン・ザ・メガチャーチ」では、「推し」に翻弄される人々が描かれる。いまは神なき時代、それに代わるのは「推し」という物語であるというメッセージは考えさせられる。

コスパの徹底した世界は、本当に人間にとって幸福な世界なのだろうか。年末の実家での家族総出の大掃除を懐かしく思い出す。私はときには、車でなく歩いて目的地まで行ってみたい、七輪で魚を焼いてみたい、障子張りに没頭してみたい。その時間にはコスパでははかれない、何か大切な行為の一瞬の尊さが潜んでいるように思えてならない。



鳥取大学医学部  
地域医療学講座  
教授

谷口 晋一  
(たにぐち しんいち)

谷口 晋一 教授の「職場の健康づくり研究室」は、今回にて最終回となります。谷口教授には平成26年より長きにわたりご寄稿いただき、厚く御礼申し上げます。